

剣士の日記

作成日時 : 2005/02/17 01:27 >>

家の近くにある武蔵野公園は、剣術の稽古にもってこいの場所です。

人がほとんど来ないし、何より自然がかなりの程度で残っているのです。私はその場所を勝手に武蔵野道場と呼んでおり、十分に活用させてもらっています。

そこには、種類の違った梅ノ木が三種類も自生しており、毎年初夏に実を付けます。

三年間ほどは落ちてくる梅の実に無関心だったのですが、あるとき思い立って、青いうちに実を拾い持参したタコ糸を手ごろな枝に巻き付けてその先に楊枝をくくり付け、楊枝に梅の実を刺して垂れ下げ、それを模造刀で抜き打ちに切り付けるということを思い立ちました。

最初は10回の内四回ほどしか成功しなかったのですが、毎日やっている内に(その時期は仕事の関係で、日中フリーになることが出来たのです)、10回中8回実に当たるようになりました。

水平抜き打ちです。当たると、カチンツと大きな音がして種まで両断されます。模造刀ですから刃は付いていないのですが、スピードがあるので、種も斬れてしまうのです。それは気持ちが良いものですよ。

その稽古を続けている内に、実をただ斬るだけではもったいないと思うようになり、落ちて実を拾って家に持ち帰り、梅酒を造ることを思い立ちまし

た。

粒の大きい立派な梅で、これまで近所の人や公園に遊びに来た人たちがどうして注目しなかったのか、と思うほどなのです。

梅の実が、刃のない居合刀で両断できるということを妻に話したところ、そんなことが出来るはずがない、と藁って取り上げないので、ある日両断した実を幾つか家に持って帰り、台所のテーブルに置いておいたところ、妻はそれを見て驚き、自分がやっている居酒屋で、機会があるごとに客に話しているということです。

そこで集めた梅を漬けた梅酒を店に持って行き、「武蔵野自生梅酒 ただし若干刃味あり」と書いて、商品としたところ、質問が相次ぎ話題の種となった次第です。

後日談は、又次の機会に。

前回の記事を書いて数ヶ月が経ってしまいました。記事を読んでもくれた方には御無沙汰しました。小生は3月に引越しをして、現在は杉並区に住んでいます。

新しい稽古場を確保しましたよ。神田川沿いにある塚山公園というところで、森になった片隅の杉林の下が我が稽古場です。むろん、毎週日野市の本部道場には通っているのですが、一番大切なのは自主稽古ですからね。時間さえあればわが「塚山道場」に通い、木刀と居合刀を振るっております。

管理事務所のある公園なのですが、薄暗い樹影を形作る理想的な場所とすることが出来ます。背後の小道を散歩の人が通ることはありますが、わが稽古場所は行き止まりになっているので、通行人に影響を与えることはありません。

そこで稽古をしていると、日常生活の些事がきれいに消えて無我の境地に至ります。眼前に常に具体的な相手の姿を想定して、体転、回転、受け流し等の業を用いて自在に剣を振るうわけです。一時間があっという間に経ってしまいます。基本の素振り、居合の業を加えると、千回を肥える剣を振るうことになります。

無我の時間、終了後の爽快感、何とも云えないですね。これからも稽古の様子、本部道場での出来事、時代小説や、歴史小説を読んだ感想など、どんどん書いていきますので、お便りを下さい。

剣士の日記

<< 作成日時 : 2007/01/01 00:25 >>

しばらく書き込みをしていませんでしたが、平成 19 年の新年を向かえまた記事を書こうと思っています。画像は新年を迎えるに当たって愛刀を公開することにしました。一昨年小金井市から杉並区に転居して公園での稽古場所が変わりました。武蔵野「道場」に劣らない素晴らしい林の中で、まさに私のために用意された場所のごとくです。この場所での稽古風景はいずれ公開します。どうかよろしく。

愛刀の公開

<< 作成日時 : 2007/02/17 21:59 >>



思考錯誤の末やっと写真を入れることが出来ました。私とカミさんは文京区小石川で小さな PUB を営んでおり、そこでは毎月一回ライブコンサートを行っています。もう三十回を超えました。今月は、「中東の音を聴こう」というキャッチフレーズの元に、我が国のウッド演奏の第一人者常味裕司氏とデック(タンバリン)の和田啓氏を招いております。そこで小生は詩の即興朗唱を披露します。もう日が迫ってきました。2/23日(金)午後七時半からです。チャージ 1500 円。飲食は別料金です。12 名限定。チケットは残りわずか、ぜひどうぞ！

「刀道・文武両道塾」の詳細

<< 作成日時 : 2007/02/17 15:21 >>

立ち上げた「刀道・文武両道塾」の詳細についてお知らせします。

場所 丸の内線茗荷谷駅前 文京区スポーツセンター剣道場(徒歩二分)

内容 古武道としての剣術(真剣刀法)と護身術を合わせた武道教授。我が国の歴史、文学を共に学び、声を出す鍛錬をし、詩朗唱術を身に付ける。

「文武両道塾」のモットー

武備ある者は必ず文事あり。文事ある者は必ず武備あり。

日時 四月までの稽古日 2/26(月)、3/12(月)、3/26(月)、4/15(日)、4/28(土)

教授料 一回二千円



江戸東京博物館大ホール公演

<< 作成日時 : 2007/02/19 22:16 >>

私は、現在日本文化普及会「藍の会」という団体に所属しています。結成してまだ5年ほどの新しい団体ですが、日本舞踊、面踊り、書道、居合道、空手、刀道等古典芸能、文化、武道を含むユニークな創造団体です。ほぼ毎年大きな公演を打ってきましたが、今年は6月9日(土)二回公演を行う予定です。小生は刀道の部でこれまで誰も試みたことがない真剣刀法を披露する積りです。この記事を見られた方は、FAXにてご予約下さい。(佐土原)

場所 両国・江戸東京博物館大ホール

日時 6月9日(土)昼の部 開場12:30 開演13:00

夜の部 開場16:30 開演17:00

入場料 当日4,000円 前売3,800円 学割(高校生以下)500円





「トーキョー・ポエット・カフェ」ライブ案内

<< 作成日時 : 2007/02/21 21:26 >>

小生は、剣を振るい詩の即興朗唱をやっていますが、文京区の小石川にカミさんが飲み屋を経営しており、そこでランチを担当しています。

店の名はトーキョー・ポエット・カフェ。

月に一度プロのミュージシャンを招いてライブをやっています。すでに32回にもなりました。

今月は、主に中東で使われているウッドという楽器の我が国における第一人者である常味裕司さんとレック(タンバリン)演奏者和田敬さんを招いて、23日にライブを行います。

7時半から2ステージ行い、チャージは1,500円。12名限定。飲食は別料金です。すでに明後日に迫ってきました。まだ間に合います。予約をどうぞ。

写真は、去年のライブのときの常味さんとお客の記念写真、店内の風景です。





(注：春日・後樂園駅前地区都市再開発事業により、2015 年 12 月に閉店しています。)

三月二十三日は、ポエット・カフェ月例ライブの日。

前回予告しましたように、ウードの常味裕司さんとレックの和田啓さんに来ていただきました。

レックという楽器はほとんどの人が名前すらきいたことがないのではないのでしょうか。一言で言ってしまうとタンバリンのことです。

むしろ本場の楽器ですから、我々が日常眼にするタンバリンとは構造が違って、やや複雑な感じで、大きさも少し大きいように思われます。

それが、10 拍子のリズムに乗って、革張りと鈴の音を同時に響かせながら、玄妙な中近東独特の音を発するわけです。よく映画の一シーンにベリーダンスが登場しますが、あのときに使われている楽器がレックです。

メインのウードは西洋の楽器の半音の半音という摩訶不思議な音で、エキゾテイズムを掻き立てるのです。

「この場にへそを出して躍る魅惑的な女性がいればなあ」などとつぶやく不謹慎な人(私か?)も居たようですよ。

ライブ！ライブ！ライブ！

<< 作成日時 : 2007/03/21 19:05 >>



3月17日。北海道石狩市在住の木版画家大島龍が、銀座のゆう画廊で(東京での)5年ぶりの個展を行った。彼は小生の30年来の友人で、詩の朗唱活動を共に行った同志でもある。リュウはこの四、五年ヨーロッパの各地で個展を開催できるほどの実力者となった。彼の個展開催を記念して、「コラボレーション祭」というイベントを二人で考え、ミュージシャン、詩人、舞踏家、役者を招いて、お祭りを行った。狭い画廊に20人ほどの観客が集り、実に刺激的で創造的な空間が現出した。参加者を紹介します。パーカッションの石塚俊明、フォルクローレの標忠弘、三味線の早乙女和完、縄文笛毅(つよし)、舞踏の雪ユウ

子、独芝居の愚庵亭遊佐、この日の主人公・版画家・で詩人の大島龍、詩即興朗唱の小生(佐土原台介)、飛入りの詩朗読の女性三名。それに、北海道から直送されたシャケ、チーズ、その他美味の品々。銀座三丁目の一角が大きな魂の炎を発して燃え上がった瞬間であった。



ライブ情報 トーキョー・ポエット・カフェ

<< 作成日時 : 2007/03/21 17:57 >>

前回の写真は別のものでした(意図的なものではありません)。正しい画像を出します。



刀道・文武両道塾の稽古

<< 作成日時 : 2007/03/21 18:17 >>

3月12日。両道塾三回目の稽古。四人が参加する。刀道の基本形をビデオ撮影するために専門化が参加した。道衣にマイクを取り付け動きながら要領よく説明するのは相当に難しい。道着の畳み方、着付けから始まって正座の要領などを手抜きなくきちんとやらなければならない。刀の振り方から組太刀段位別基本形に行き着くまでにまだまだ時間がかかるが、一步一步積み重ねてゆく努力と根気が求められる。これからが正念場といったところ。次回稽古風景は写真入と成ります。お楽しみに！

至誠館道場 35 周年記念パーティ

<< 作成日時 : 2007/03/23 17:10 >>



全日本刀道連盟の本部道場でもある、東京都日野市の町道場東京至誠館が設立 35 周年を祝いました。各界から名士が 100 人近くが集う賑やかなパーティとなりました。この道場は優に100畳敷きはある日本一広い町道場と言われています。小生も招待客の末席を汚し、様々な分野の人たちとの交流を楽しみました。写真は上から日野市市長、全日本刀道連盟最高師範・林邦史郎先生、全日本空手道連盟武心会最高師範・田浦和孝富先生を初めとした幹部の方々です。

塚山公園道場(自称)での稽古

<< 作成日時 : 2007/03/23 17:39 >>

この二、三日から急に春めいてきました。剣術の稽古には持って来いの状況といえます。

今日も木刀、小刀、居合刀をケースに入れて我が敬愛すべき「塚山道場」に向いました。

自転車で二分の所です。昨日から学校が春休みに入り、子供たちが広場歓声を上げて遊んでいました。

たくさんあるソメイヨシノもあと数日で満開になることと思われます。いつもの場所で稽古をしていると子供たちが寄って来て、「おじさん、その刀本物？」と問いかけてきます。小金井市住んでいたときもそうでしたが、子供たちの最初の質問は決まって同じです。面白いですね。





稽古を終えて、子供たちに居合刀を持たせてやりました。こういう機会は彼らには滅多にあるものではなく、大人になってもこの時のことを覚えてくれているはずだ、と思ったからです。これも次世代を育てる伏線と思えば良いのです。

桜満開 強風

<< 作成日時 : 2007/03/30 18:41 >>

3月30日。朝方雨が降っていましたが、午後から日が射してきたので、「塚山道場」に稽古に出かけました。強い風が吹いていて、すでに満開状態の桜の花びらが渦を巻いて舞っていました。それでも花見客が氣勢を上げて楽しんでいましたよ。そうした姿を遠目に見ながら、一時間強素振りと型の稽古を行いました。回転動作では風にあおられてからだがぐらつくほどでした。でも、稽古を終えた後の爽快感はなんとも言えませんよね。帰って飲む酒も一段と旨くなるというものです。



新しい中間と剣道場で

<< 作成日時 : 2007/03/30 18:19 >>

3月26日。間もなく桜も満開です。文武両道塾を始めて三回目の稽古日。三人いるメンバーのうち二人が欠席、新たに加わったメンバーが一人参加して、小生を入れて三人と女性の見学者が一人、計四人の稽古です。まだ素振りも満足に出来ない状態ですから、中々前に進めません。何事も繰り返しが必要です。覚えるまで執拗に繰り返し指導します。あとのステップに進むときの、皆さんの期待感を想像すると小生も少し興奮してしまいます。



ポエット・カフェのランチ

<< 作成日時 : 2007/04/21 18:30 >>



4月16日。小生は今のところ、三つの活動領域を持っていて、大変忙しい状況にあるわけです。一つは、詩即興朗唱活動、二つ目は刀術の稽古、三つ目は店のランチ担当者としての作業。

店というのはカミさんが経営しているトーキョー・ポエット・カフェという

パブのことです。昼間は魚中心のランチを提供していて、焼き魚と煮魚の二種類だけです。(夜は、ママが着飾って？飲み屋に変身)。ただし、魚も副菜も日替わりで、自分の食堂という感じで毎日食べに来てくれるお客さんもいます。

魚の種類は、塩さば、銀さけ、ほっけ、赤魚、子持ちかれい、さば味噌煮といったところです。副菜は野菜の煮物や炒め物、香の物は自家製糠漬け、それに味噌汁、フルーツが付きます。魚などの種類に関わらず値段はセットで全て800円。七年前の創業時から値は同じです。たまに魚屋の仕入れ状況によって、あじの干物が登場したりします(写真)。

週の四日間食堂のオヤジに掛かりっきりになり、ランチ終了後は次の日のための仕入れ、下準備があり、作業を終えるのがだいたい五時半。それから一杯飲んで帰宅、という順序になるのですが、帰る準備をしているときに常連客が顔を覗かせたりすると、カウンターに座りなおしてさらに酒が進む、といったことになってしまいます。そうすると、帰宅してから何か書き物をするという気力が失せてしまいます。それでは、あじ干物のランチセットと、夜の店の様子を写しておきます。

詩人 白石かずこさんと久しぶりに共演

<< 作成日時 : 2007/04/21 13:30 >>

4月21日。詩誌「詩人会議」のメンバーを中心にした、「朗読集団 coe 声」の会合に出席。小生は『メンバーではないのですが、招きを受け飛入りとして参加しました。長老の編集長秋山宏先生を始め、ベテラン若手が混在する多彩な朗読集団です。

特筆すべきは、それこそ詩朗読では我が国詩壇の最先端に位置する白石かずこさんが、ゲストとして招かれていたことです。小生は、北海道に在住の頃、し朗唱運動体を仲間と共に組織し、道内外の詩人たちを巻き込みながら、しきりに朗唱活動を行っていました。そうした時期に白石さんとお会いし、仲間多数と共に移動朗唱を行ったものですが、小生が20年前に再度東京へ出てきてからはほとんどお会いする機会がなかったせいか、席に挨拶に出向いた小生のことを、余りよく覚えておられないふうでした。白石さん自身さすがに年齢の移ろいが感じられ、改めて時の経過を意識させられた次第です。

白石さんは相変わらず巻紙形式の作品を朗読されていました(写真参照)。小生は、即興で匿名性と秘匿性の無くなった現代社会に踏み込んだ内容の言葉群を朗唱しました。また、その席に友人の山下智子さんが姿を見せていたことに驚き、席を移ってもらって親しく言葉を交わしました。彼女は巷では滅多に見かけることの出来ない飛び切りの美女で、彼女と同席すること自体誇らしくなるほどです(写真参照)。

白石さんも山下さんも二次会への出席は無かったのですが、残った coe の皆さんと剣術の話など話題にしてよく飲みよく食べ歓談を尽くしたような訳です。



ポエット カフェ ライヴ 第33回

<< 作成日時 : 2007/04/30 21:31 >>



2007年4月27日(金)。ポエット・カフェ第33回目のライブ。出演はテナーサックスのローラン・佐藤さん。実はローランさんとは初対面なのであるが、積年の友人であるジャズドラマー中村達也さん(通称たっちゃん)が紹介してくれたのである。この人はケイタイを持たないというのが主義とのことで、南北線の後樂園駅に着いてから店

まで案内するのに多少手間取ったが、むろんケイタイが無くても公衆電話で足りるわけである。12人しか入れない店に定員の12名の客がひしめき(椅子は10脚しかない)、7:30の定刻どおりにライブ開始。ローランさんは弁舌巧みに曲の解説などをし、「ソニー・ロリンズからサム・テラーまで」の謳い文句どおりにジャズ、ムードミュージック、歌謡曲まで、巧みにかつパワフルに吹き分け、受けに受けていた。そこに、ドラム、ベース、ピアノが加われば、どんなに楽しかったことだろう。最後は、剣師さんこと佐土原の詩即興朗唱との競演。テナーのパワーに負けじと大音声で言葉を発する。音楽が、内耳に響く爆裂音から外界へ弾き出て、世界を限りなく超え出てゆく、といったことを発したように思う。サキソフォンの音は耳をつんざくように大きい、すぐ横に居るのに心地よく感じられた。

江戸東京博物館大ホール「がらがらぽん4」本公演大成功

<< 作成日時 : 2007/06/24 14:05 >>

2007年6月9日 先に予告しておきました「がらがらぽん4」の公演が成功裏に終わりました。スタッフ・出演者を含めて総勢60名に達する人たちが、一つにまとまるということがいかに大変なことであるかということを(毎度のことながら)痛感させられます。今回小生が出演する刀道の部では、水につけた巻き藁30本、一台14, 5キロもある試斬台四台の用意の全てを小生一人の手で行うという荒行を行ったので、かなり体力を消耗してしまいました。本番を待たず、その用意をすっかり終えたその時点で、半分成功したようなものです。写真がまだ出来ていないので、手に入り次第、公開したいと思っております。

ポエット・カフェ・ライブ第34回

<< 作成日時 : 2007/07/08 18:37 >>

2007・7月8日 去る6月29日、店の第34回目のライブが行われました。この日のライブの主役は、三味線の早乙女和完、小鼓の今井甚也両氏です。和完さんとは以前からの付き合いでスタイルは承知していましたが、今井さんは初めてで、お会いしたとき思ったより若かったので、少し驚きました。客も限定12名のところを、和完さんが声をかけてくれた人を含め、16人にもなる盛況で、たまたま店を訪れた岩手県山田町にお住まいの方、新潟県長岡市の女性、長野県にお住まいの美術評論家の先生などが臨時の入場者となり、座るところがなくカウンターの内部にまで入っていただく騒動となり、お客様には不自由を掛けてしまいましたが、それもまた熱気の一部と成った具合で、楽しんでいただけたと思っています。小生は、夕方の買い物の帰りにふと思いついた「日常」ということをテーマに、ゲストのお二人の音をバックに詩の即興朗唱をやりました。こうして様々な音楽家と詩即興朗唱のセッションを行うことにより、テーマも深まり、勘どころも研ぎ澄まされることになります。今月27日には、和完さんの紹介でライブに顔を出してくれた、薩摩琵琶弾き語りの塩高和之氏をお迎えします。興味のある方は早めに申し込んで下さいね。狭いカウンターの中に入って、右往左往しなければならない可能性が大いにありますから。

ジャズライブ 氷見進さん

<< 作成日時 : 2007/07/15 23:07 >>

2007年6月30日

すでに18年ほど前になりますが、横浜馬車通りに「今野アートサロン」という素敵な画廊があって、そこでジャズを中心にしたライブが定期的に行われていました。マスターは口ひげを生やした今野さん(残念ながら数年前喉頭がんで他界されました)。控え目な人でしたが、ジャズが好きで、今では伝説的になってしまったような有名な人たちが演奏していました。

私がドラマーの中村達也さんと組んでそこで詩朗唱ライブをやっていたときに、客として見えていたのが氷見さんです。家電の大手メーカーの技術者とのことでしたが、ピアノを弾くというので、その店の備え付けのピアノを弾いてもらいました。クラシックからビートルズまで、スラスラと弾きこなし、その流麗さと力強さにびっくりしてしまい、今野さんの後押しもあって、その店で何度かピアノと詩朗唱のデュオコンサートを持ちました。実はこの人は、大学時代からライブ活動を行っていて、仕事の関係などで、活動を一時中断しているとのことでした。小生との競演で再びライブへの情熱に火が点き、今や様々な開場でライブを行っておられるようです。



この日、彼の案内で参宮橋にある「レインボースタジオ」というライブハウスで演奏が行われ、小生は鑑賞に向かったというわけです。一部はソロ、二部はアルトサックス西村貴行、ベース川原田智也両氏を交えたトリオ演奏です。とても素敵な洗練された演奏で、満席状態(40人ほど)の若い客たちに大いに受けておりました。終了後、久しぶりの再会を祝し合い、そのうち「また二人でやりましょう」と約束を交わして別れました。会場でいただいたワインのほてりが頬に心地よく、上機嫌で家路に向かったしだいです。

ポエツライブの写真公開

<< 作成日時 : 2007/07/15 23:23 >>

07年7月初旬。前々回の記事で6月29日のポエツライブのことを紹介しましたが、写真に不備がありここに改めて紹介します。毎度のことで申し訳ありません。
一枚目の写真。奥が早乙女和完、右端が今井陣尋也の両氏。二枚目、奥が詩即興朗唱の小生(剣師さん)。三枚目、お客さんを含めた全員の記念写真です。





ポエット・カフェ・ライブ薩摩琵琶演奏

<< 作成日時 : 2007/08/04 12:03 >>

2007年7月27日 この日第35回目のポエット・カフェ・ライブが持たれました。演者は薩摩琵琶の塩高和之さん。氏は国内外で活躍する著名な琵琶奏者で、年一回持たれている高野山常喜院での演奏会も後二ヵ月後に迫っているようです。琵琶による平家語りは、筑前琵琶の上原まりさんが有名ですが、こちらは、武士の教育に使われたという薩摩琵琶ということで、音の響きも違うようです。ジャランジャランと掻き鳴らされる琵琶独特の響きは、しょっちゅう聴いているものではないのに、心の奥底から我々の情緒を掘り起こす懐かしさを伴った音として聴こえてきます。まるで、先祖から蓄積されてきたDNAが開放されてもしたように。良く訓練された張りのある声である「祇園精舎の鐘のこえ～」の語りが狭い店内に満ち渡ると、ほっとしたような、嬉しいような感慨が沸き上がるから不思議です。小生も、平家語りの反歌という形で即興朗唱を(かれの即興琵琶を背景に)披露させていただきました。客は10人丁度でもったいない限りなのですが、目と鼻の先で本格的な琵琶を聴けるとあって、たいそう喜んでいただきました。次回は沖縄の陽気なサンシンと島太鼓です。乞うご期待！





2007 年8月13日

剣師としての小生の日常の行動の半分ほどを読書が占めております。これまで、ほとんど紹介することは無かったのですが、久しぶりに面白い小説を読んだので紹介がてら感想を述べてみようと思います。

このところしばらくは、鳥羽亮の剣豪小説を読んでいたのですが、少し飽きてきたので、図書館で物色していたところ、花家の分厚い本に行き当たりました。正直なところ、この作者のことは名前すら知りませんでした。花家という姓に惹かれて『乱舞(みだれまい) 花の小十郎始末』『鬼しぐれ 花の小十郎はぐれ剣』と題する二冊(他に大沢在昌の『パンドラアイランド』)の計三冊を借り出した次第です。

未知の作家ではあるし、余り期待はせずに読み始めたのですが、何と余りの面白さに寝食を忘れ、明け方まで読みふけり三時間ほど寝て七時前には起き出して、小石川の店に向かうという日々が数日続いたのです。

そのたった三時間の睡眠時間の中にも小十郎が夢に出てきて、疲れた脳をかき乱してくれます。女好き、酒好き、大法螺吹きかつまた剣術が滅法強い小十郎から逃れるすべはありません。

そこにまた、大御所となった徳川二代将軍秀忠、筆頭老中土井利勝、柳生宗矩、柳生十兵衛、果ては宮本武蔵まで出てくるのですから面白くない訳はありません。他にも何冊か著書があるようなので、探しまくって呼んでみようと思っています。

『新宿鮫』で有名な大沢在昌の『パンドラアイランド』も面白いですよ。地味な書き出しから始まって、加速度的にぐいぐいと物語の世界に引き込んでゆく大沢節を堪能しました。いやあ～、小説ってほんとに面白いですね。

2007年8月14日 連日途轍もない猛暑が続いています。カラッとした暑さならまだ少しはしのぎやすいのですが、家から一歩外に出ると、覚悟も自覚も無くサウナに飛び込んだような、湿り気のある猛暑ですからこれはたまりません。

店が数日前から休みに入っており、冷房を掛けた部屋に閉じこもり状態なのですが、剣師としての誇りと自覚を奮い起こし、連日近くの塚山公園に稽古に出かけました。しかも一日で一番気温が上がる午後二時から一時間強剣を振り続けるわけです。出かける前に大粒の梅干を食べてつめたい麦茶をぐくぐくと飲み、残りをペットボトルに詰めて、木刀、稽古用の模造刀の大小を入れた刀ケースを担いで、自転車で出掛けます。

目的の場所へは五分ほどで着きます。自転車を漕ぐ間にもたらたらと汗が背中を流れ落ちるのが感じられます。気温は確実に35度を上回っていると感じられます。稽古する場所は、樹木が密集している林の中なので助かっています。いわば決死の覚悟で家を出てくるわけですが、稽古場所に辿り着いて腰に帯を巻いていると、彼方の野球場では、炎天に晒されながらユニフォームを着用した子供たちが元気に練習試合をしているのを望むことができます。その子供たちにどれほど元氣付けられるかー。

弱音を吐いているわけにはいきません。稽古を続けているうちに、吹き出る汗を快感に感じるようになるから不思議です。汗まみれで帰宅した後、冷水を頭からかぶる何ともいえない快感を思うと、稽古にも一段と熱が入ります。



昨日まではそうでした。今日も朝からうだるような暑さで、午後からの稽古のことを考えるとついひるんでしまうのですが、ふと思いついて泳ぎに行くことにしました。

去年は一度も泳いでいないこともあって、杉並区に問い合わせ屋外プール場所を教えてもらい、意気揚々とちゃりんこを漕いで出掛けました。大宮八幡社のすぐ近くにあるプールです。20分ほどかかりました。お盆やすみのせいかたくさんの人が詰め掛けていました。二年ぶりの屋外プールです。50メートルの大プールで、心行くまで泳ぎを堪能しました。肌もたつぷりと焼き、夏を満喫した思いになりました。

帰りに、冷たいビールをどこかで一杯と思い、駅周辺を回ってみたのですが、それらしい店が無く、喉をからして帰宅した次第です（何故か家で飲む気はしなかったのです）。それだけがこころ残りでざんねんでなりません。明日も天気なら同じプールへ出掛けようと思っています。明日は絶対どこかで店を見つけ冷たいビールを飲むぞ！

ジャズ ライヴ at MORIギャラリー

<< 作成日時 : 2007/09/02 14:48 >>

2007年8月27日

40℃近くの猛暑が続いています。熱中症で病院に運ばれたりしていませんか。
この日、案内があつて銀座の外れにある「MORIギャラリー」という画廊(実質的にはライブハウス)にジャズのライブを聴きに行ってきました。

夕方から出掛けたのですが、暑さは半端ではなく、夏用の(肌が透けて見えるような)作務衣に下駄履きといういでたちです。少し時間があつたので、新宿西口の地下街のラーメン屋で生ビールと冷やし中華をいただき、地下鉄で店へ向かいました。この店には一回来ただけなのですが、常連の鶴見さんや柴田さんの顔があり、何度か来たことがあるような気持ちになりました。店のオーナーである森夫妻は小生のカミサンが経営するポエット・カフェのライブに来ていただいたことがあり、周知の間柄なのです。

ご主人の森さんは画家でありピアニストであるという華麗な芸術家なのですが、お父上は森亨という一世を風靡したトロンボーン奏者であり、その没後10何周年に当たるとかで、かつての仲間や次世代のミュージシャンが集って、ライブが行われたという訳なのです。そのとき出演したメンバーの写真ではないのですが、MORIギャラリーのライブの様子分かる写真を掲載しておきます。



ライブ終了後は、食べきれないほどの料理や飲み物が供され(すべて 3,500 円の
入場料込み)、さながら宴会の趣を呈し、これで採算が取れるのだろうかと思われ
たほどなのです。お客が、演奏にも、飲食にも満足して帰ってくれば自分たちも
満足、という森ご夫妻の経営哲学によるものとのことで、素晴らしいの一語に尽き
ます。

その上、生の演奏付きで歌まで歌わせてくれるのですから、これはたまりませ
ん。小生は、そのときのメンバーである松本憲清さんという素敵なピアニストの伴
奏で、「Star Dust」を歌わせてもらいました(下がその時の写真です)。詠い慣れて
いる朗唱と違って相当に緊張しましたが、英語の歌詞を間違えることもなく、心楽し
く歌うことが出来ました。テンポ、間合い、を絶妙なタイミングでピアノが合わせてく
れるのです。素晴らしいとしか言えません。生演奏をバックに歌ったら、二度とカラ
オケではでは歌いたくないという感じでしいた。



大満足の態で帰ろうとするとき、奥様の森和子さんから、かねてお誘いのあった小生の詩朗唱公演を改めて依頼され、日にちを10月27日(土)に決めました。パートナーは、以前小生と組んで何度か公演したことのあるピアノの氷見進さんです。開演は午後四時。会費は飲食料込みで 3,500 円となる予定です。ぜひ来てくださいね。

場所「銀座モリギャラリー」

沖縄民謡 豊岡マッシー&としこ

<< 作成日時 : 2007/09/09 22:28 >>

2007年9月7日 この日は第36回ポエット・カフェ・ライブの日です。出演は、沖縄民謡の豊岡マッシーさんと奥さんのとよこさんのお二人。琉球に伝わる古民謡からキナショーキチさんの唄まで、三線、二胡、島太鼓、指笛を駆使してあくまで陽気に、楽しく、あるいは厳かに唄い奏してくれました。皆を乗せるのもうまく、全員が椅子から立ち上がって躍りだす始末。これが沖縄だ、という感じでした。小生も即興で沖縄を詠えばよかったのかもしれませんが、どうせ、青く澄んだ海だの太陽だのもんきりの言葉しか出てこないのが分かっていますから、あえてテーマを人種のるつぼとしての列島日本に移し変えて、

沖縄人をアイヌをクマソを熱帯の島国の人たちを語りました。そうして最後に「私たちは日本国と名付けられた島に住み、日本語を話しているが、私たちは日本人ではない」と言って、即興朗唱の締めくくりとしました。何故そうやってしまったのか、自分にも分かりません。





剣術とは私にとって何か

<< 作成日時 : 2007/09/24 17:20 >>

2007年9月15日

少々大げさなタイトルを付けてしまいましたが、今何故剣術なのかということは、私にとって大問題であり続けています。いわく「精神の修養」「伝統文化の継承」「身体を鍛える最上の方法」「武士道の追体験」等など。

無論それはそうなのですが、修行の過程で様々な現実問題が生じてきて、私を悩ませるのです。私がいまだその域に達していないということなのでしょうが、何故好きな剣術を存分に稽古することが出来ないのか、何故人との関係で稽古に障害が生じてしまうのか、あれこれ考えていると夜眠れない日だってあります。

悩みを払拭させるためには、ひたすら稽古あるのみ、と仕事の合間を縫って、近所の塚原公園(写真の場所)に出掛けて木刀と居合刀を振り続けているわけです。私は、全日本刀道連盟というところに所属し、日野の本部道場で10数年に亘って師範から型や斬り方を教わり、曲がりなりにも七段という段位までいただき、師範も勤めてきましたが、ここに至って道場を休む日が半年近く続いています。

一方で、自ら「刀道・文武両道塾」という組織を立ち上げ、剣術の業だけではなく、我が国の歴史や芸術に精通し、より大きな人間として成長を遂げるという目標を掲げて、後進の指導にも力を入れているわけです。それでもまだ吹っ切れない何かがある。それは完全に私の中にあるものです。

公園で無心に刀を振っているときには、悩みも迷いも何もなく、まさに「無」の状態にあります。その瞬間私は完全に一人であり、同時に全宇宙と繋がっているという気がするのです。そこに私の全てが凝縮されていると言っても過言ではありま

せん。写真の場所は、私が稽古をする地点を左右から見た図です。環境としてはまさに申し分のない場所なのです。そういう場所で存分に剣を振るえる私に、何の悩みが必要なのでしょう！



自らの鬱屈した気持ちを皆さんと分かち合いたいと書き始めたこの記事ですが、書いている内に悩みが薄れ晴れ間が見えてきました。「がんばれ、ダイスケ、お前は決して一人ではない、自信を持って初志を貫徹せよ」という内なるなる声が聞こえてきます。ありがとう！頑張ります！

ポエット・カフェ・ライブ 第36回

<< 作成日時 : 2007/09/30 22:51 >>

2007年9月28日

今日のゲストは、先月NYからやってきた白人のサックス奏者 Ken Simon(ケンサイモン)さんです。

彼は、小生の長年の友人であるジャズドラマーの中村達也さんが、店に連れてきて紹介されました。以前NYでドラムの勉強をしていた時にお世話になった人だというので、小生も達也さん(以下たっちゃん)に義理があり、何としてでも店のライブを実現したいと思い企画しました。

ユダヤ人ではないかと思わせる掘りの深い顔立ちで、ミュージシャンにふさわしい威厳とユーモアのある人なのですが、いかんせん、小生は英語のヒアリングが苦手で、相手の言うことがよく分かりません。何か言われる度に「イヤー」と知ったかぶりにアイツチを打ち、誤魔化していたのですが、それでも、店でライブをすることを決め、条件を話し、約束の期日どおり店に辿り着いたのですから、褒めて貰わなくては成りません。

高い鼻が潰れているのはご愛嬌ですが、さすがにその訳を尋ねる勇氣はありませんでした。幸いなことに、ポエット・カフェ・ライブの常連客になってくれた「ウェブトップ」社長の鶴見さんが、英語の堪能な人を連れてきてくれたので、大いに助かりました。本来なら、そのお礼に飲み代をタダにするとかすべきでしたが、他の客と同じようにいただいてしまったのは、何とも情けないことです。さて、Kenさんの演奏です。ソプラノ及びテナーサックス、フルートまで持ってきており、スイングジャズの名曲、ジョージ・ガーシュイン、マイルス・デイビス、ソニー・ロリンズ、果ては、ジャズフルートの名手エリック・ドルフィまで幅広く演奏してくれました。



圧巻は、ソプラノとテナーを同時に口にくわえ、W演奏したのにはびっくり仰天しました。きちんとハーモニーを奏で、一つの曲になっていたんです。大喝采を受け、



小生の詩即興朗唱をもきちんと受け止めてくれ、心地よいエンディングを迎えることができたという次第です。

小生の詩即興朗唱のテーマは、「世界としての音楽」というもので、「音楽は世界を変え、自分を変え、人生に豊かさを与え、愛を育む」といったようなことを、語ったように思います。時に音楽は人を殺し、発狂させるという側面を語りきれなかったのは残念と言うべきです。ハートのこもった素晴らしい演奏でした。

来月にはNYに帰るということでしたが、こちらにやって来たときにはぜひ尋ねてきてくれと、名刺を手渡されました。向こうでの仲間との演奏をぜひ聴きたいものですね。



詩即興朗唱公演のチラシです

<< 作成日時 : 2007/10/05 20:04 >>

2007年10月2日

今月27日(土)に「銀座モリギャラリー」で行われることになった、詩朗唱(佐土原台介)とピアノ(氷見進)のジョイントコンサートのチラシが送られてきました。

小生(佐土原)は詩朗唱で出演するのに、何と刀道の制定道着を着てワラを斬っている写真が掲載されています。間違ったのではないということです。わざとその写真にしたということなので、小生も訂正を申し込みませんでした。説明を聞かされていない人は、刀の試斬が行われるのではないかと、期待しているかもしれませんね。

でも、目の前に客がいるような場所で刀を振るえば、幾人かの死傷者が出ることは確実です。従って、27日には刀を振るうことはありません。期待されている方には気の毒ですが、ここは言葉の刃で、皆さんと切り結ぼうと考えております。単独での公演なので、即興だけではなく自分の詩(書いたもの)の朗唱があります。

ピアノの氷見さんは、「ビートルズからクラシックまで」幅ひろく演奏の出来る人で、ジャズはもちろんのこと、即興演奏も自在にこなします。また、詩人の飛入りゲストも用意しています。二時間弱のジョイントライブを心ゆくまで楽しんで下さいね。

開場 17:30 開演 18:00

＜銀座 モリ ギャラリー サロンのご案内＞

佐土原 台介 & 氷見 進 ジョイントライブ

即興詩人佐土原台介氏とピアニスト氷見進氏の異色の顔合せ。
お互いのユニークな個性が発揮され、音楽や詩の多様な面白さに
思わずうなることでしょう。



●氷見 進 (ひみすすむ)

大阪府生れ。高校在学時にジャズに開眼。
大学時代より都内ライブハウスで演奏活
動を始める。詩人とのコラボレーション、
フリーインプロビゼーションなど試みる。
現在、茨城県日立市在住。ソロ演奏会、
天球コンサート、NHK水戸放送局など
で演奏。



＜プロフィール＞

●佐土原 台介 (さどはらだいすけ)

1941年 愛媛県宇和島生れ。
1979年 詩劇団運動体「ウラヌス」を結成。
各地で公演。
1990年 ニューヨークで、ベーシスト吉沢元治
氏とデュオ及び、折原美樹さんを加
え三人で各所の公演。(自作の英語詩)
又、日本古武道の全日本刀道連盟に
所属、真剣を用いての実戦刀法の習
得に励む。
1996年 音楽の人道との即興演奏と、詩の
即興創作を連動・確立させる。
現在、「刀道・文武両道塾」主宰。
全日本刀道連盟本部道場師範・教士七段。
日本文化普及会「藍の会」創立会員。

後援：日本文化普及会

10月27日(土)

時間：午後6時～9時

会費：3,500円

(飲み物、軽食付)

※当日は席の都合上、必ず下記まで
予約をお願いいたします。

銀座モリギャラリー

〒104-0041

東京都中央区新富1-16-8新富町営和ビル5F

TEL03-5541-2070 FAX03-3537-7202

Email: morim-p@gol.com



■地下鉄有楽町線/新富町駅3番・5番出口徒歩3分
■地下鉄日比谷線/八丁堀駅・築地駅徒歩5分
■都営浅草線/宝町駅A1出口徒歩8分

料金 ￥3,500(フリードリンク、軽食つき)

場所 銀座モリギャラリー

大沢在昌の本

<< 作成日時 : 2007/10/08 11:20 >>

2007年10月8日

私は今大沢在昌の小説にはまっています。

ただ困っていることが一つあって、彼の小説を読み始めると、他の事に手がつかなくなってしまう、結局はその日一日何も出来なくなってしまうからなのです。贅沢な悩みかもしれませんが、相当悩んでしまうのですよ。

この休みを利用して(三日間)2003年刊行の小説『天使の爪』上下二冊(974頁)を読了しました。米CIAとロシアSVR(旧KGB)の対決にまで発展するスケールの大きなサスペンス小説で、一気に読まされてしまいました。(それまでは同じく図書館から借りてきたドナルド・キーンの大著『明治天皇』を読んでいたのですが、かなり専門的な評伝であり、面白くて一気に読了というわけにはいかないので、忍耐強くぽつりぽつりと読んでいたところに、大沢の本を借りてきたものですから、ホッと気を緩めた瞬間に、「天使の爪」が突き立てられたという訳なんです。『明治天皇』については、いつ読了できるか見当が付きませんが、そのうち読後の感想を述



べる積りです)

さて、大沢の小説です。彼の小説は『新宿鮫』以来、日本の警察機構への痛烈な批判が軸になっています。この小説でも、CIAの思い通りに動く日本の警察の右往左往する様が、半ば戯画化されながら描かれています。その本質を一言でいえば、「体制のメンツにこだわって、小回りが利かない」ということに尽きます。マスコミの目を必要以上に意識し、重大な犯罪に対して思い切った行動が出来ず、都合が悪いと思ったことはたちまち隠蔽してしまう、という陰湿な体質を、大沢は全ての小説で指摘し糾弾します。ただし、その中で活躍する主人公の警察官は、マスコミの目などくそ食らえと大暴れするのです。機構からも世間常識からも大幅に逸脱してしまうのですが、正義のための活躍ですから、結局は体制側もしぶしぶ認めざるを得ないという構図になっている訳です。そこが泣かせ所なのです。

この小説は、CIAとSVR(エスヴェーエル)それに警察庁公安部の三つ巴の攻防だけではないのです。脳移植と麻薬という問題が絡んでくるから面白いのです。「仁王」と徒名された巨大な体躯を持ち、なおかつ体術に優れ頭も切れる、これ以上ないという理想的な警察官と、かつての恋人で脳移植という途轍もない手術を受け身体は別人となった女性麻薬取締官がコンビを組んで、巨大な悪と殺人鬼に挑みます。

脳移植は現代医学では技術的にも倫理的にも有り得ない設定ですが、小説でそれを可能にさせることによって、自分の脳と別人の身体の融合によって必然的に起こる、拒否反応と人格の分離という大問題に作者は迫ろうとしています。「仁王」は、かつての恋人である河野明日香の脳を信じ、途轍もない美人の肉体を得たアスカを一体として愛そうとするのですが、脳の明日香は、男のタッチに敏感に反応

する別人の肉体に嫉妬し、その肉体におぼれようとする「仁王」に不信感を抱いてしまうのです。そういう関係でありながらも、コンビを組んで悪と戦っている内に信頼関係を取り戻し、脳の明日香は美人の肉体を自然に受け入れるようになる、というラブストーリーが大きな軸になっています。

この小説は以前に読んだ『天使の牙』という作品の続編であることを読んで知りました。興味をもたれた方は、『天使の牙』を最初に読まれると分かりやすくなります。

さあ、いよいよ『明治天皇』に取り掛かるぞ。一杯飲んで、決意と勇気を鼓舞するんだ。

明治天皇」上巻読了

<< 作成日時 : 2007/10/14 16:34 >>

2007年10月14日

大沢在昌の小説から一気に滑り込んだ「明治天皇」上巻566頁を読了。

初めは遅遅として進まなかった頁も読み進むにつけ速度が速くなりました。上巻は、父帝孝明天皇時代の幕末からはじまります。その時代に起こる激動の出来事は一般の歴史書を見ていただくことにして、天皇家とそれにまつわるエピソードのことなどについて、若干の感想を述べたいと思います。

孝明天皇が英邁な方であったことは本書で繰り返し述べられていますが、自分の考え(攘夷、開国不可)が幕府によって次々になし崩しにされることによって、晩年は政治に対する情熱が薄れ、後宮に閉じこもる日々が続くようになったことが語られます。様々な女性との間に皇子皇女六人生まれましたが、無事育ったのは皇子(後の明治天皇)ただ一人でした。

また明治天皇についても15人の皇子皇女が誕生しましたが、育ったのは5人だけというきわめて低い生存率で、同時代の農家よりはるかに低いものであったそうです。従って、成長した祐宮(さちのみや)に対する孝明天皇の期待と喜びのほどが察せられるわけです。

しかし孝明天皇は慶応二年(1867年)天然痘によって崩御します(一説には毒殺)。翌年睦仁親王(むつひと 祐宮)踐祖。わずか15歳の若さです。新天皇の若年を良いことに、取り巻きの公卿や重臣たちが、勅諭と称して天皇名で勝手に布令を発したことは容易に察せられます。驚くべきことに、孝明天皇在世中に発せられた倒幕の蜜勅なるものも、二人の公卿の手で勝手に作られたことが分かっています。明治新政府を手中にしたかつての幕末の志士たちや公卿たちは、天皇がい

つまでも15歳のままでいてくれたら、と願ったことでしょう。

しかし、当然のことながら天皇は成長し大人になります。不平士族の反乱、西南戦争を経るに従って、自らの意見を堂々と述べる事が出来るまでになった明治天皇は、しきりに地方への巡幸を行い、病院や学校を訪問し、時に手土産をご自身で購ったり、下賜金を下されなどして、民情を理解することに努めます。

そうして15年の月日があっという間に過ぎ、憲法発布の手順にまで漕ぎつけるのです。尊皇攘夷や佐幕の思想が交錯し、日本人同士が凄惨な切り合いを演じていた頃からまだ20年にもなっていないのに、日本はあっという間に西洋列強を模した近代化にこぎつけ、強国の仲間入りをしたことに、この本の作者のドナルド・キーン氏は驚嘆の賛辞を惜しんでいません。そうして、憲法発布の緒準備に国論が沸くところで上巻は閉じられます。

私は今平行して二十数年前に中央公論社から出た『日本の歴史』全26巻を二回読み返し今三回目に入っており、第16巻「開国と攘夷」を読み終わったばかりのところですが、『明治天皇』とダブっているわけですが、一方は、幕府(武家)側から描いた幕末、一方は皇室(公卿)側から描いた幕末を同時に読んだわけで、感慨深いものがあります。

さて、下巻は日清、日露両戦争という大事件が加わります。明治天皇は何を考え、何を命じたのでしょうか。読み終わり次第また報告させていただきます。



春原武彦さん他四人展

<< 作成日時 : 2007/10/28 23:13 >>

2007年10月22日

小生の友人であり優れた絵画作家春原武彦さんを含めた4人の作家たちが銀座でグループ展を持ちました。

その初日に松坂屋で買った芋焼酎を一本引っ提げて、六丁目にある「ギャラリー アーチストスペース」へ出掛けました。もう一人小出英夫さんという造形作家が加わっていて、その人も昔からの知り合いです。

こじんまりとした空間に大勢の人が詰めかけ、すでにパーティが開かれていました。この二人を除く他の二人は初めて会う方々で、あまり会話をすることもなく注がれたワインのグラスを片手に、作品を観て回りました。

春原さんの作品は絵ではあるのですが、手書きの作品にコンピューター処理を施して、版画の一種であるリトグラフに似た作品に仕上げるという一風変わった作風で知られています。しかも個展の度に作柄を変え、精力的に新しい画風を打ち出してくるその創造性は感嘆すべきものがあります。

宴たけなわの最中に、春原さんの知り合いとおぼしきいかにも作家らしい風貌の中年男性が入ってきて、作品を眺めながら、しきりに「惜しい惜しい」と呟いているので、初対面ながらその訳を聞いたところ、描かれている絵の一部がピカソの作風を彷彿させるというのです(写真の絵)。



小生もピカソは良く観てきたので似ていれば「おや」と感じたはずですが、言われるまでまったく気が付きませんでした。というより、強いて似ているといえば「そういうところがあるかもしれない」と思わないでもないのですが、私の見るところでは、完全に自らの想像力でピカソ風を凌駕しており、何ら問題はありません。その人に「ピカソはお好きなんですか？」と言わずもがなの質問をしたところ、「大好きです」と答えられました。なるほど、自ら愛しているものの磁力に全てを引き寄せてしまうということかな、と自問自答しその場を離れていきました。作品というものは、鑑賞する人の立場によってどのようにも変化し、変貌してゆくものであるということを、今更ながらに思ったひとときでもありました。写っている人物の内、一番手前が小出さん、その隣りが春原さんです。



詩朗唱とピアノのジョイント

<< 作成日時 : 2007/10/29 23:42 >>

2007年10月27日

この日は台風接近の報があり、朝から激しく雨が降っていた。数年ぶりの詩朗唱公演というのに「なんちゅうこった👿」とグチをこぼしていたのであるが、どうにもなるものでもない。

朗唱予定の作品を取り揃えるなどして準備を整える。気圧が下がっているせいで、頭が重くひどく憂鬱である。そういう時は風呂に入って全面的に湿ってしまおうと風呂に入ることにした。身体全体が湿ってしまうと、頭が少しクリアになった気がした。👴

用意を整えて二時過ぎに家を出る。天気予報では、夜に入って関東地方は暴風圏に入るとのことで、暴風雨襲来の真っ最中にポエジーの声を張り上げていることになる。「日ごろの行いがよほど悪いのだ」と思わざるを得ない。

ピアノの氷見さんと会場で4時に合うことになっていたが、すぐ近くまで来たときにまだ3時半であったので、近くにあったうどん屋でピリ辛みそうどんを食べ、ビールを飲んだ。🍺相変わらず雨は降り続け、風も少し出てきたようであった。ビールのお蔭で、気分は上向いている。

氷見さんはすでに会場に来ていてオーナーの森和子さんと談笑していた。やはり台風のことが気になる。5時を過ぎたあたりから、風雨はますます強まり、予約キャンセルの電話が入ってくるようになった。たとえ客が一人でも断固やるぞ、と氷見さんと語り合う。

ジャズドラマーの中村達也さんが早々と駆け付けてくれ、気分は盛り上がる。着ているトレンチコートが上から下までずぶ濡れた。6時の開演間際になって続々と

客が詰めかけてくれ、たった一人を前にしての公演という最悪の事態を免れることが出来た。飛入りでの詩朗読を予定していた葛原りょう君も遅ればせながらやってくる。

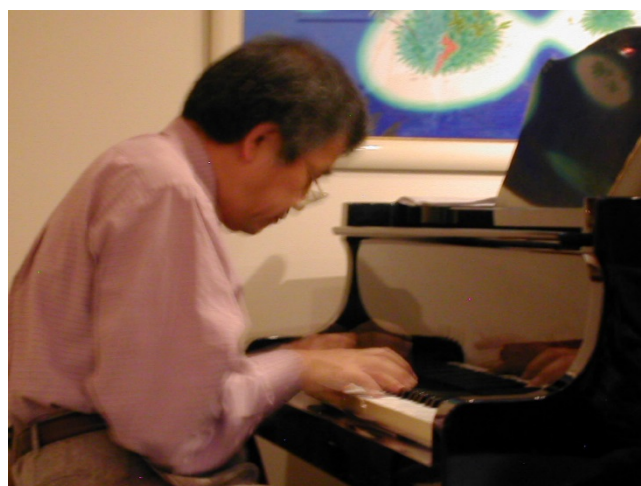
定刻に開演。司会の女性の進行でギャラリーのオーナー森茂さんの挨拶があり、小生の詩朗唱と氷見さんのピアノの文字通りの競演が始まる。私は、10年前に出した詩集『メガロポリス狂想』から「骨片の落下」「天地交響―巨樹の内奏」の二編を朗唱。氷見さんの力強い鍵盤の響きが脳髓を叩く。外は暴風雨の真っ只中だ。そういう状況が逆に気分をエラボレイトしてゆく。一部の最後は、数年ぶりに書き上げた「溶けてゆく私」という作品を音なしで朗唱。

15分間の休憩で飲み物が出る。ビール、ワイン、焼酎、酒、なんでもある。実に心強い限りである。二部の冒頭はりょう君の自作詩朗読。彼は短歌もやっていて、福島泰樹さん主宰の短歌誌『月光』の巻頭を飾ることになった数編を絶叫朗唱。次は氷見さんのソロだ。ガーシュイン、ビートルズ、ベートーベンと、一聴脈絡が無いようでありながらまとまっている一曲、といった形の面白くもスリリングな演奏があり、🎵最後は客から題をいただいての即興である。

気ままに題をだしてもらおう。台風、月、夢、花、薔薇、といった脈絡がまったく無い言葉がポンポンと発せられる。👤🌸🌀🌹それらをうまくつなぎ合せて一遍のポエジーを創造しなければならない。20秒ほど経った後、氷見さんに開始の合図を送る。冒頭に出てきた言葉は、夜空に煌々と輝く月だ。暴風雨との対照がひらめく。空はあんなにも晴れて煌々と月が照っているのに、私の脳髓の中は風と雨が吹き荒れている。そこに夢が重なってきて私の意識を遠くに連れ去る。夢が現実の人生であり、現実が消え去ってゆく一遍の夢であることが語られる。意識はどんどんと高まり、言葉も高揚感に満ちてゆく。私は物語ることを止め、物語を壊すことに

意識と言葉を集中させる。ついに「直径20センチの頭蓋の中の宇宙よ、大脳も、小脳も、視床下部も、海馬も全て溶け去って一つとなり、暴風雨となって吹き荒れよ」と絶叫する。ピアノが破壊をさらに打ち砕こうとガンガンと響き渡る。もうどうともなれという心境である。極限と言っていい。

思ったとおりの終わり方になり、気分は存分に晴れた。後の、飲食を交えての客との団欒で、即興を絶賛する人がいて、私を勇気付けてくれた。10時を過ぎて帰る頃には嵐も止んでいて、天も燃焼しきった私たちを祝福してくれているようであった。🌈





そばきり寄席 亀戸東庵

<< 作成日時 : 2007/11/04 23:46 >>

2007年11月4日(土)

ピアノ弾き語りの江戸賀あい子さんが、落語家と一緒に亀戸の蕎麦屋でライブをやるというので、出掛けることにした。

江戸賀さんは、今年六月に催された「がらがらぽんⅣ」(江戸東京博物館大ホール)でステージに出た仲間である。彼女は舞踊の部で唄を歌い、小生は武道の部で刀道の演武を行っただけの仲にすぎないのであるが。

普及会の仲間である山後、鶴見の両氏を誘い亀戸駅で待ち合わせる。あらかじめ地図をコピーしておいたので、駅から20分ほども歩いたが、場所はすぐに分かった。少し早めに着いたので、隣りのお好み焼き屋で鶴見さんと一緒にビールを飲む。

定刻に少し遅れて開演。客席は狭いがほぼ満席状態。初めは入船亭扇辰(せんたつ)師匠の落語から。総武線で会場にやって来る間の出来事を巧みに話しの間に取り込みながら、仏教伝来から長野善光寺創建の由来に至るまで、面白おかしく語られ、突然閻魔大王が登場してさらに話しの奥行きを与える。地獄の亡者には石川五右衛門やホリエモンが登場する始末である。

荒唐無稽な趣を呈していて、その一見無秩序な筋立てに笑いが止まらない。古典落語とのことであるが、縦横無尽なアドリブが、ことさら可笑しい。この落語家の才能を示している。落ちに至る筋立てを書くとながくなるので省略することにする。

続いてあい子さんが登場。狭い店にでんと構えられたアップライトのピアノを弾きながら、ポピュラーな歌謡、自作の作詞作曲の曲を、軽快なテンポで歌い上げる。低音も高音も声が良く通り、歌手としての成熟した歌唱が心に沁みた。

休憩を挟んで再び扇辰師匠の出番。これも古典であるが、やはり、随所にアドリブがさしはさまれる。色っぽい御新造の声と、下女の声を巧みに使い分け、粹と艶の世界を作り上げる。高度な芸である。笑えばなしで涙が出てきて、ハンカチで拭いながら嘸を聞いていた。

打ち止め後は、出演者が参加しての飲み会。思い思いに酒や蕎麦を注文して歓談に耽った。手打ちの美味しい蕎麦なのであるが、20名ほどの人たちが一度に注文することになったので、注文した品が中々出てこず、白けてしまう場面が度々あった。予想できることなので、注文の品を限定するとかして工夫が必要である。20回もやっているというのであるから、同じことを繰り返しているとは思いたくないのであるが。

蕎麦焼酎の蕎麦湯割を三倍もいただいてしまう。蕎麦屋にはこの酒がやはり一番良く合うようだ。時間が来たので、名残を惜しみつつ東庵を三人で後にした。





ポエット・カフェ・ライブ第37回

<< 作成日時 : 2007/11/17 02:09 >>

2007年11月9日



この日のゲストは、我が国では珍しい女性フラメンコ・カンテの第一人者遠藤あや子さんと、フラメンコギターの名手日野道生さんのお二人。日野さんはこれまで二度出ていただいたが、遠藤さんは初めてで、彼女の歌声を聴くのも初めてである。

開始は7:30からなのであるが、打ち合わせのためということで、5:30の开店間もなくにお二人が来店された。しばし雑談の後打ち合わせ開始。初めて聴く遠藤さんの美声に、準備の手を休めて聞き惚れてしまった。スペイン本国からやって来た女性カンテを公演で聴いたことがあるが、男性と同じように渋みのある野太い声で歌っていた。

ところが遠藤さんはしわがれたようなだみ声ではなく、その顔付きのように良く響

く澄んだ美声であり、その声の響きと声量なら、クラシックであろうがロックであろうが演歌であろうが、どの分野でも第一級の歌手として通用することは確実であるとおもわれたほどである。

ポツリポツリと客も姿を見せ始め、ライブの雰囲気が次第にかもし出されてくる。定刻に開始。12名の客で一杯になる狭い店であるが、予約の無い客も飛び込みで入ってきて、寿司詰め状態となる。

気の毒なのは、トイレに近いところに席を占めた客で、誰かがトイレに向かうたびに立ち上がって通行の間隔を開けなければならないことである。同じチャージ料を払って来ているのに、不公平なことこの上も無い。かといって、飲み代を一杯分安くしたりしないのが、店のずるいところでもあり公平なところでもある。

日野さんのギターも以前聴いた時と面目を一新したように繊細で、時に激しく、ま



た情緒に富んでおり、我が耳を十分に堪能させてくれた。

歌い演奏するゲストと一番近い客は、一メートルほどしか離れておらず、演者たちの息遣いや胸の鼓動までつぶさにわかるほどであり、場合によっては、歌い手のスバキを浴びることにもなる。演者にとってはやりにくいということもあるであろうが、客にとってはまず有り得ない状況であり、感動もまた別の高ぶりをもたらす様

子である。

素晴らしい雰囲気の中に20分間の休憩を挟んだ一時間半にわたるライブが終わった。それでも誰も帰る人がいない。グラスを片手に客と出演者の歓談がいつ



果てるともなく続く。これがライブなのだ！この夜は、小生の詩即興朗唱が入る余地もなく、完璧なエンディングを迎えた。

刀道全国大会&古武道演武会

<< 作成日時 : 2007/11/20 21:53 >>

2007年11月11日(日)

全日本刀道連盟の全国大会も今年で20回目となる。初代会長である中沢敏先生の没後10周年にも当たっており、20周年記念大会と銘打ち、会場を日野の高幡不動尊に設定して、古武道演武会を兼ねた大きな行事となった。



小生はここ数ヶ月日野の本部道場に行っていないこともあって、会場設営等何のお手伝いも出来ず、団体戦出場のみの一剣士として参加した。会場は都内でもほとんど唯一と言っていい五重塔の半地下に設けられた台講堂である。そこには本尊である阿弥陀如来像が置かれている。五千円の参加費を払いお土産の紙袋に同封されているパンフレットを覗いてみると、古武道の参加団体が20ほども記載されている。



当初は小生も演武で参加する予定でいたが、これだけの参加があると時間の制約もあり、主催者側の参加は無理ということになり、辞退したといういきさつがある。参加団体は、ブラジル、韓国、沖縄、大阪、静岡、東京、栃木、埼玉等、国外にまで及ぶ国際大会といってもいい規模のものとなった。

10時定刻に開会宣言。多数の来賓挨拶の後、団体戦からプログラムの開始。小生のチームは、即席の混成団体。先鋒、中堅、大将の三人を一チームとして、二チームずつトーナメント方式で優劣が争われる。三番の札を引いた小生の刀道チームが、秩父の神刀流チームとトップで争うことになった。先鋒はこちらの勝ち、中

堅は負け、大将の私が勝てばチームの勝ちになるところであるが、水平の二本斬りの一本を倒してしまい、見事に斬った相手チームに負けてしまった。そこで参加者としての私の出番は終わりである。



早々と着替えを済ませて、残りの団体戦、各流派の演武を楽しんだ。団体戦は各チームとも良く稽古を積んでいる様が見受けられ、見ごたえのある試合となった。次々と勝ち進んで優勝をしたのは、先鋒小学生、中堅中学生を含む無双直伝英信流(居合道)のチームで、会場を埋めた観客から熱狂的な拍手が送られていた。各古流の型はともかくとして、試斬は初歩的なものばかりで、業の多彩さと実戦刀法の迫力では、刀道が一番優れているとつくづく思った。来年は必ず演武者として出演することを自らに誓う。会場で旧知の仲間と出会え親しく会話することが出来たことは収穫の一つである。

小生と一緒に 写真に写っているのは、以前刀道の仲間であった山地さんである。彼は、いま北辰一刀流の師範となっており、目黒道場主である。



明治天皇下巻を読み終えて

<< 作成日時 : 2007/11/20 22:14 >>

2007年11月16日(金)

先に上巻を読み終え感想をこの欄で綴ってからすでに一カ月が経過している。二度も図書館に出向いて再借り出しをしている。その間放っておいたわけではなく、毎日少しづつしか読むことが出来ずにいたわけである。

休日のこの日、残りの百数十頁を一気に読み上げた。五時間ほどの時間がかかった。上巻566頁、下巻582頁の大冊評伝を読了した感慨は、格別のものがある。

この本には、多出する天皇の勅語が古文体で書かれていて(訳文が付けられているのではあるが)それを読み込むのに、多少の労力と忍耐を要するのである。それが重なると眠気を催し、頁は閉じられる。

上巻読了の感想で、下巻は日清、日露の戦争が記述されることへの期待と気持ちの逸りを述べておいた。しかし読み進んでみると、様々な国家的事件が頻繁に起こっているのであり、そうした事件と向き合う天皇の反応や言葉が興味深く綴られている。

ただし、天皇は喜怒哀楽の感情を滅多に外に出すことは無かったといわれる。たとえば、日露戦争で旅順陥落の報せをいち早く天皇に伝えに出向いた参謀本部次長長岡外史が、一刻も早く勝利の報せを天皇に伝えようとして、まだ玉座に着座していない天皇に向かい、歡喜の表情を浮かべながら戦争の勝利をお伝えすると、天皇は無表情のまま二三度かすかにうなずいただけであったという。長岡は落ち込んでしまった。

かといって、天皇が喜怒哀楽の感情を持たない冷徹無比の人であったわけではない。ときにいたずらを仕掛けて大笑いし、飲食の席でテーブルに一滴でも酒が残っている以上席を立つことなく、ことごとく飲み干してしまったという。

暴君的な要素はまったくと言ってよいほど無く、臣下の言うことにはことごとく従い、真夏の行幸の耐え難い暑さの中で、一言の苦情も、また苦痛を訴えるということも無く、蒸し風呂のような鳳輦(ほうれん)の中で正座したまま揺られ続けていたという。

この本を読む限り、立憲君主の見本のような人であつたらしく、ロシアやドイツの皇帝のように独裁権を欲しいままにすることはまずなく、有能な臣下に政治を任せていた。むろんそれら股肱の臣下ですら決着がつかないような局面では、自ら聖断を下すことはあつた。そうしたときの聖断がことごとくツボにはまつたのは、有能で果敢な元老や侍読がいたからである。

天下国家の政治(まつりごと)に携わるそれらの人物を鋭く見分けて、枢要な役職を割り振る眼識がなかったなら、日清、日露の両戦争に勝ち抜くことは出来なかったかもしない。こうして日本は、一気に世界の一等国の仲間入りをすることが出来たのである。

天皇崩御の後、外国のある新聞は「睦仁(むつひと)は日本の名高い天皇の一人であつたというだけでなく、現代世界の偉大な君主の一人だった」という記事を書いたという。比較的平穏であつた大正時代は、明治天皇の遺産で過ごした時代であつたといえる。しかし昭和に入って力を付けておごり高ぶった軍部が、露骨に天皇の大権を犯すようになる。

もはや昭和天皇には、明治天皇のような臣下に睨みを利かせる力は無かつたの

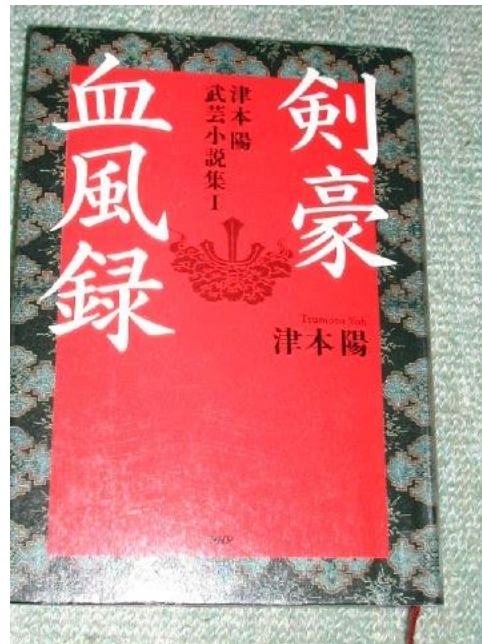
である。日露戦争に勝った奇跡に等しい勝利は、軍部を抑制の効かない怪物に仕立て上げてしまった。後は暴走して自滅するのみ。

実はそのレールは明治時代に引かれたものであった。だが、日本民族の、高飛車に出やすくおごり高ぶった驕慢な民族性は如何ともしがたく、連戦連勝によって継続された精神の高揚がもたらした歴史の必然を、もはや誰にも推し止めることはできなかったのである。

剣豪血風録』津本陽 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/02 02:08 >>

2007年11月23日(金)



津本陽が新しい剣豪シリーズを出してこようとしている。

その第一冊が表題の本である。副題に「武芸小説集 I」とある。津本は名だたる時代(歴史)小説家であり、私はそのほとんどを読んでいる。おびただしい作品を物しているので、代表作はこれ、と名指しすることは難しい。強いていえば、信長を描いた『下天は夢か』と言えようか。

彼の時代小説の顕著な特色は、主人公の生地の方言をしゃべらせていることにある。信長なら名古屋弁、西郷隆盛なら鹿児島弁、竜馬なら土佐弁といった具合に。どの小説でもその方法は変わらない。信長が全編一貫して名古屋弁で会話するその新鮮な感動は、今もって忘れることが出来ない。作品に強烈なリアリティを与えている。

他の時代小説には無いその新鮮さに惹かれると共に、もう一つの特色である剣豪小説にも他の作家には無い面白さがある。津本は抜刀道の大家中村泰三郎先生(古人)から真剣刀法を学んでおり、若い頃竹刀剣道をやっていたこともあり、作中で解説される刀法がすこぶる理に適っており、深く納得できるからである。著作は数多いが、東郷重位を主人公とした初期の作品『薩南示現流』は傑作といつてよい。

だが、たくさんの著作を読み進むうち、作品に類型化がみられ(特に男女の関係)興を殺がれることが少なくない。物語構成に難があるからである。

そこで本題に入るが、表題の作品集は、雑誌に書きなぐった作品を寄せ集めた感がなきにしもあらずで、はなはだ雑である。著名な名人・剣客がずらりと書き並べられているが、主題が定まっておらず恣意的な記述が多い。

これまでの通説と異なる記述を心がけようとすることは理解出来るが、新しい資料を発見して書き加えるというわけではなく、文章の量を確保するために、勝手に「新たな事実」を、これぞ小説家の特権とばかり捏造(想像)して延々と書き連ねている箇所が多い。塚原ト伝、宮本武蔵、柳生十兵衛の項などがその良い例である。

しかも史実とは異なる記述さえみられる。「柳生十兵衛」の項で飯篠長威斎のことが語られるが、彼を新当流としているのは間違いで、神道流であるべきであり、参籠したのは鹿島神宮ではなく香取新宮である。墓もそこにある。どうやら塚原ト伝と混同しているようなのだ。揚げ足を取るようであるが、それほどに書き急ぎ、殴り書きの感があるのであり、彼の小説のフアンとしては何とも残念というしかない。第二集もこのような調子であれば、作者に直接手紙でも出すしかないであろう。

天狗剣法』津本陽 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/08 03:16 >>



2007 年12月2日

『剣豪血風録』と共に図書館から借りてきた津本の一冊である。

副題に「法神流須田房之助始末」とあるのを目にして心が躍った。法神流開祖榎本法神(うめもとほうしん)については、小生のHP『五七五七七剣豪伝』で取り上げたが、須田房之助はその道統を継ぐ二代目である。

この本の話の骨子は、著者自らが注記されているように、高崎市在住諸田政治先生の著書『法神流聞書一実録 蘭原騒動一』にほぼ全面的に依拠している。

私はこの本を18年前に読んだ。その18年前に実は私は諸田先生とお会いしたのである。(そのとき先生は80歳に近かったから、ご存命なら90歳を優に超えられておられることになる。三年前まで先生と年賀状のやりとりをしていたが、その後賀状は届いていないので、もしかしたらお亡くなりになったのかもしれない。)

前橋市に戸山流抜刀術師範の偉い先生がおられるという噂を私が聴き付け、そこからそう遠くない桐生市に住む友人のF君(野太刀自現流をよく遣う)と語らって押しかけて行ったわけである。前橋市の御自宅で奥様の接待を受け、3時間ほどもお話をうかがった。

そのときまだ20歳後半であったF君の太い腕と体格を見て先生は、「あなたは持って生まれた剣の資質があるようだ」とおっしゃったことを憶えている。私ではなく、友人の方がそう言われたので、多少気落ちしたのは確かだが、刀剣や、剣術や、古の剣の名人達人にについて雄弁に語る先生のお話に引きずり込まれ時を忘れた。

色々聴いた中で特に印象に残ったのは、「かの山岡鉄舟が、50歳代で亡くなったのは過度の飲酒が原因である。およそ剣の名人達人と言われるほどの人は、酒で命を縮めるようなことはしないものである。鉄舟は幕末の偉人と称えられ、悟りを得て一流を開いた剣の達人とされるが、そういう死に方をした鉄舟は、私に言わせれば二流の人物である」と断定されたことである。

長生きすれば良いというものでもないが、酒で早死するような生き方は名人達人の理想とは程遠いということを言われたのであろう。そういわれても私は鉄舟が好きであるが、「なるほど」と妙に納得したのである。

津本の本の中身に還らなければならない。榎本法神は、赤城山麓の山中に仙人のように暮らし、医術を良くし、森の中を飛ぶように走る人間離れのした剣術遣いであつたとされ、その教えを受けた房之助も神通力を身に付けたといわれる。その超人的な強さが返って禍となり、地元の剣客に決闘を挑まれた挙句、(剣術ではとても勝ち目がないというので)相手方に銃で討ち取られる結末を迎えるのである。

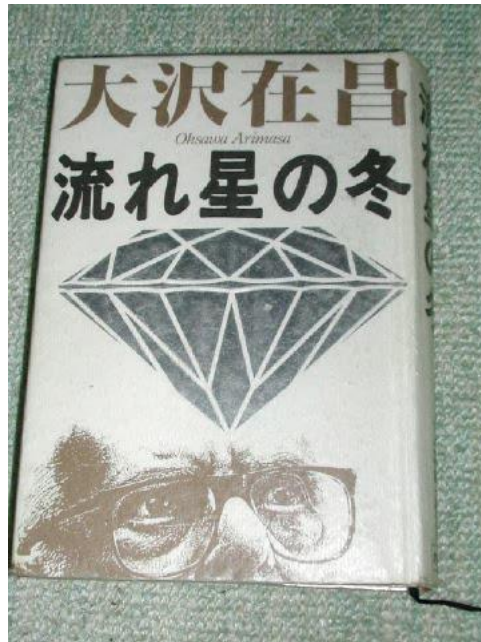
同じ郷土の先輩として須田房之助を尊敬し、百数十年前に起こったその出来事

を調べ上げた諸田先生は、房之助の無念の最後を惜しんでおられる。ところが、津本氏の小説は、房之助は討ち取られることなくその場を逃げ延び、他国で一生を終えることになっている。当時の文献によれば生存説もあるようであるから、津本氏の小説の結末が間違っているとはいえない。ただし、諸田氏は、房之助死亡はまず間違いないとほぼ断定されている。

法神にしても房之助にしても、剣術史の主流から外れた存在であるが、過去のどんな名人にも勝るとも劣らない達人振りは記憶しておくに値する。

大沢在昌『流れ星の冬』読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/10 00:11 >>



2007年12月7日

この本は今から13年も前に双葉社から発刊されており、このところ毎年のように出されている大沢の新刊書を読破している小生としては、古い本を掘り起こして読んでいるかのごとくであるが、図書館の書棚に並んでいる未読書を手当たり次第に借りてきて読み漁っているだけであるから、年代や著者の傾向の変化とはほとんど関係のない次元にいる。

この本の主人公は、短大の教授を勤めながら悠々自適の生活を送っている葉山という65歳の初老の男である。現在は教授などをやっているが、実は40年も前に窃盗団の一員として世間を騒がせた犯罪者なのである。しかし、悪事が露見する前に窃盗団(流星団)は解散され、5人いるメンバーの誰一人として逮捕されることなく全ての事件の時効を迎えている。従って過去を気にすることが無ければ、大手を振って大道を闊歩出来る立場にいる。

ところが40年前に盗みに入った家で、その当時のお金で時価数億円を下らないと思われるダイヤモンドが入った袋をみつけ、処分が出来ないままリーダーの手でどこかに隠される。むろん全体の共有財産であるから、それぞれに隠し場所は知らされるが、抜け駆けて掘り出すことは硬く禁止される。それをやれば他の仲間によって草の根を分けても探し出され、処刑される手はずである。

ところがあることがきっかけとなって、ダイヤを手にしたのが主人公の所属していた窃盗団であることが、元の所有者によって突き止められ、ダイヤ争奪の攻防戦が始まるのである。その破格のダイヤは国家が絡む裏で取引の材料に使われようとしたのものであり、表に出るべき筋のものではない。それゆえに、ヤクザやCIAや右翼の大物が次々に登場する。

様々な駆け引きや攻防戦の後、ダイヤは葉山が手にし、自分がことの他可愛がっていた甥の命と引き換えに、裏社会からのし上がってきた大物実業家の本拠地に乗り込んでゆくのである。そこで西部劇まがいのピストルによる決闘などが行われ、葉山が勝てばダイヤは自分のものとなり、負ければ(当然死ぬことになるから)本来の持ち主である大物実業家の元に還ることになる。

撃ち合いの末、弾は当たらなかったが決闘相手の発作死によって葉山が勝ちを制し、ダイヤは葉山の手に一。しかし―――結末は本を読んでもらうしかない。

著者の意図は、敗戦直後の混乱した社会と現代とを鮮やかに対比させ、名も無い短大のありふれた一老教授として現代社会を生きるかつての泥棒のサムライ復活を、西部劇もしくは時代小説のヒーローよろしく描くところにある。裏社会に生きる人間に熱い血を吹き込む著者ならではの物語の展開は、毎度のごとく、本を下に置かせない圧倒的な面白さがあるが、絵空事を感じからいま一つ抜けきれないものがあり、二流の出来となっているというべきである。

2007年12月14日

ここ数年電車の中で目だって気になる現象が2, 3ある。

その筆頭は、出入口を背にして突っ立つ人が増えたということである。ということは、つり革につかまって窓の方に向かって立つ乗客と向かい合うということを意味する。昔から日本人は面と向き合うことを避けてきた。「眼(がん)を付ける」という言葉があつて、それが意識されると喧嘩になっても不思議ではないほどである。従つて、出来るだけ面と向き合うということを避けてきた。それにも拘らず「面と向き合い」「眼を付ける」わけだから喧嘩を売っているに等しい。例によつて特に若者が多いが、向き合うことになった人たちは、下を向いたり、目を背けて在らぬ方を眺めたりして、目と目が合うことを極力避けようとしている。周囲の大多数の乗客と向き合う若者(時としていい年をしたおじさんもいる!)が、乗客から文句を言われたり、喧嘩を売られたりすることを覚悟して立っているとは思われない。

彼らは面と向き合うことがどういう結果をもたらすかということに、何らの意識がなく無自覚なのである。日本人としての最低限の礼儀や恥じの感覚が失われたということを、いまさらあげつらつても始まらない。彼らにとって自身とかかわりの無い人間は、たとえ目の前にいようとモノでしかないのである。従つて何ら気にする必要がない。満員電車の中で化粧する女もおそらく同じ感覚である。目の前にいる人たちがニンゲンではなくモノであれば、一人化粧台に向かって入念に化粧することと何ら変わりはないのである。

つまり彼らの意識状態は、自分だけが実在の人間であり、直接関わりのない他の人間は仮想現実(バーチャル・リアリティ)なのである。ゲーム機の中の存在な

のである。短絡的で、将来に対する想像力がすっぱり欠如した殺人(特に尊属殺人や自殺)もこのカテゴリーで説明できる。罪を犯して初めて自分がやったことの意味を悟るのである。

どうしてこういう事態になったかということについては、学校や家庭での教育や躾の欠如、儒教道德の失墜、自由主義社会の享受等など色々な要因が絡み合っていると思われる。こういうことが原因だからこう是正すれば改善する、といった生易しいものではないと私には思われるのである。

断言できるのは、全世界を席捲しつつある欧米文明が存続する限り、人のモノ化や安易な殺人事件は増えこそすれ減ることはないであろう。イスラム教国が、アメリカを敵視するのもアメリカが欧米文明の代表格であるからであり、地域に根差す独自の文化・風習・美德を破壊してしまうと感じるからなのである。

アメリカナイズされた現代日本人も、古来より伝えられてきた日本独自の文化・風習・美德に、もっともっと注目し育てていかなければならない。いま私は、電車の中で向き合って立つ若者といつ喧嘩をおっ初めても不思議ではない精神状態のなかにいる。

「Kの日々」大沢在昌著読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/23 15:29 >>

2007年12月20日



昨年の11月双葉社より第一刷発行。

この人の作品を読むことを無上の楽しみの一つとしている私としては、今まで読んでない本が図書館の書画に出ていれば、何はともあれ借り出す手続きを取る。そうして、どんな用事であろうが、剣術の自主稽古に出掛ける時間になろうが、一挙に読了してしまわないと気が済まないのである。

むろんこの本も例外ではないのであるが、この本の眼目となるある仕掛けがその時点で解ってしまい、本来ならわくわくとさせるような驚きの結末が「やっぱりー」という感慨で閉じられることになったのは、多少残念な気がしないでもない。

少し前に出版された『パンドラ・アイランド』という無類に面白い本を読んでいなければ、或いはトリックに引っ掛かり結末に唸らされていたことであろう。つまり、「パンドラー」で使われたのと同じ手が用いられており、見破るきっかけを作ったわけで

ある。

それにしても大沢ともあろう人が、たった数年間の間に、物語のキイとなるトリックを二度使うなんてことはあってはならないことである。熱烈なファンであるだけに残念至極（多少残念一から語彙が昇格！）であるという他はない。

とはいえ、物語の展開の仕方は第一級であり、一気に読了まで突き進むことが出来たのは、さすがというべきである。三度使うということはまさか有り得ないであろうが、もし次の本でそういうことがあったら、私は氏に直接手紙を書いて想像力の衰えを糾弾し、執筆の休業を勧告する積りである。本当にそうしますよ、大沢さん。

村上春樹『海辺のカフカ』上下 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/23 18:06 >>



2007年12月23日

このところ、本格小説或いは純文学といった分野の小説はほとんど読まない。面白くないのである。ただし、村上龍の芥川賞作品『限りなく透明に近いブルー』、中上建次の小説作品はほとんど目を通した。近年では、金原ひとみ『蛇にピアス』を興味深く読んだだけである。

どうせ読むならということで、池波正太郎、藤沢周平、津本陽、鳥羽亮(司馬は7, 8年前に全作品を読了)といった人たちの歴史時代剣豪小説、大沢在昌、楡周平、宮部みゆきなどのアクション推理警察小説を手当たり次第読んできた。

昨今読書界で取りざたされている村上春樹などは、図書館の書棚にずらりと並んでいるのを横目でやり過ごして今日まで来たのであるが、ついに今年の初め、『ねじ巻き鳥クロニクル』という上中下にわたる大冊に手を出した。といっても二巻目の半ばまで読んだだけである。

布団に横たわって本を読むことが多いのであるが、『ねじ巻き鳥一』を読んでいる

とすぐに眠くなってしまい、遅滞として先に進まない。それでつい、剣豪小説などに切り替えてしまうのである。

ただし、『ねじ巻き鳥一』の中で、ナイフ一丁で人間の生き皮を手早く剥ぐ技に優れた蒙古人の話がエピソードとして語られていて、そのすさまじい情景描写に強い印象を受けた。だがそれは一つのエピソードに過ぎず、小説全体の展開とはほとんど関係はない。特異な心情を有する作家だな、という感想は持ったが、それ以上展開しなかった。

ところがつい先日、読売新聞で今アメリカで一番よく読まれているのは、村上春樹の『海辺のカフカ』であるといった記事が出ていて、興味をそそられたわけなのである。この作品によってノーベル文学賞の候補にも取り沙汰されているとあって、一層興味が湧き、表題の本を読むことになった。『ねじ巻き鳥一』と同じく、読んでいるとすぐ眠くなって、脇へ打ちちゃってしまうということが続いていたが、二巻目を少し読み込んだ辺りから読む意欲が湧いてきて、一挙に読み切ってしまった。

読後の率直な感想からするなら、この小説がノーベル賞候補となるような傑作小説では断じてありえないという一語に尽きる。随所に、哲学、音楽、文学や詩についての教養を差し挟み、またアメリカの文学やジャズについての蘊蓄を傾けられれば、アメリカ国民としては近親間を持っても不思議ではない。人間精神の不可解さと存在についての不条理をテーマにしているようにも見えるが、それは本家本元のフランツ・カフカが、余すところなく描き尽くしている。私は若い頃カフカの全集を読んだが、自らの目標を決して見失うことのないカフカの執拗にして徹底した精神は、極めて明快にかつ鮮烈に読むものを魅了した。決して読みやすく単純でもないストーリーにも関わらずである。

だが村上カフカは、読み取りにくいその構造にも増して、シュールリアリズムの手

法まで使って、状況の不条理を際立たせようとするが、読者の違和感を払拭出来ず、各状況での物語が、消化不良と言ってよいほどに徹底されないまま放棄されている。

唯一の救いは、トラック運転手の星野青年と過去の記憶を失ったナカタさんとの絡みの部分であるが、死亡したナカタさんの口から、眼も口もないぬるりとした回虫のような大きな虫が這い出てくるシーンなどは、漫画チック過ぎて笑ってしまったほどである。細部の説明不足と思いつきの発想には苦笑を禁じえないが、敢えてそのような描写を試みる大胆さと文学表現への愛は、評価すべきであろうと思う。

蛮勇といわれても良いから何かをぶち壊し提示するその努力は、文学に携わる人間の使命である。少なくとも、村上作品にはそういう姿勢が読み取れる。